

第2節 古墳時代の墳墓について

古墳時代の墳墓（ここでは7世紀代の所謂終末期古墳も含む）には、周溝墓26基、古墳34基、石槨3基がある。周溝墓は前方後方形1基を含むが、他の25基は方形である。古墳は前方後方墳2基、前方後円墳と方墳の可能性のあるものがそれぞれ1基ずつ存在するが、その他は円墳ないしは円墳となる可能性が強い。なお前方後方墳2基（寺前地区6号・9号古墳）については、前方後方形周溝墓と呼ばれている墳墓の中に平面形態が類似するものも存在する。しかし前方部および前方部をめぐる周堀の形態が、I地区A区4号周溝墓のような形態とは異なっており、所謂前方後方墳とは区別出来ないこと、また周堀出土の土器が、周溝墓のように埋葬時に土器を破碎し周溝内に投げ込む行為や、周溝内に据え置く行為が顕著ではなく、殆んどが墳丘から転落したと考えられること等により前方後方墳として扱った。

1、前期の墳墓について

前期の墳墓には、周溝墓26基、前方後方墳2基、円墳2基がある。分布をみると、4グループに分かれるようである。最も南に位置するグループは、II地区7区1～5号方形周溝墓で、方形周溝墓5基からなる（第1グループ）。南から2番目のグループは、2基の円墳（I地区A区1・2号古墳）を含む周溝墓群で、第1グループから約100m離れている。周溝墓は、I地区A区1号～12号までの11基（11号は欠番）であり、前方後方形1基を含むが、他の10基は方形である（第2グループ）。南から3番目のグループは、方形周溝墓9基（I地区C区1号～7号、D区1・2号）からなり、第2グループからは約150m北西に位置する。最も北に位置するグループは、寺前地区3号方形周溝墓と6号・9号前方後方墳で、第3グループから約160m北西に位置している（第4グループ）。これらのグループ間には、第3と第4グループの間を除いて、それぞれ古墳時代前期の集落が存在していることから、各グループ間に存在する集落と密接な関わりをもっていたことが窺える。

(1) 出土土器からみた古墳時代前期墳墓の変遷

古墳時代前期の墳墓から出土した土器は、第1節における分類のI期で、関東地方において五領式土器、群馬県においては石田川式土器と呼ばれている。これらの土器については、多くの研究者により編年作業も行なわれてはいるが、本遺跡の存在する烏川流域に関しては、地域性を踏まえた上での編年は皆無であり、本遺跡の各墳墓から出土した土器の編年の位置を直ちに明らかにすることは困難であると思われる。そこで極く大雑把ではあるが、本遺跡の存在する烏川流域を中心とした地域の編年図を作成し、これに本遺跡出土土器を位置づけていくという方法を試みた。なお土器の「地域編年」は、現在の行政区画単位で行なわれる場合が多いが、一步踏み込んで考えると、それは現在の「地域」であって、考古学が対象とするそれぞれの時代の「地域」と整合するとは限らないことに気付く。従ってここでは、古墳時代当時は烏川とその支流地域であっ

第3章 調査の成果と問題点

た埼玉県児玉郡市を含め、また土器様相に関連が認められる群馬県赤城山南麓と、埼玉県比企地方北部を関連地域として捉えることとする。

I-1期

定型化した前方後円墳の出現後で、小型精製土器群のうち小型丸底埴、およびそれに類似した丸底や小さな平底をもつ小型埴形土器が共伴しない段階を1期とした。これは本地域と密接な関連が想定される伊勢湾西岸地域における「納所編年」^①のII期、埼玉県での横川好富氏編年^②の五領I式期に対応する。

定型化した前方後円墳が出現する時期は、奈良盆地では纏向3式期（庄内式新段階）で、東海地方西部では元屋敷期古段階に対応するとされている。烏川流域において、元屋敷期古段階に位置づけられる東海地方西部系の土器は、新保遺跡141号住居跡出土S字状口縁台付甕形土器、貝沢柳町遺跡1号方形周溝墓出土パレススタイル壺形土器等がある。前者は口縁部の形態が安達厚三・木下正史氏編年^④のII期に対応するもので、庄内式土器と伴出した小墾田宮推定地出土の甕と同一段階である。また後者は、元屋敷期古段階にみられるもので、長野県松本市弘法山古墳^⑤から出土している。これらの元屋敷期古段階の土器を出土した遺構は、直上ないしは20cm～30cm上方に浅間C軽石純層が堆積しており、元屋敷期古段階という時期が、浅間C軽石降下前後およびそれからやや遡る時期であることを示している。なお熊野堂遺跡においては、弥生終末期に欠山式高杯を模倣したもの（第I地区13号住居跡^⑦）や、菊川式類似の壺形土器および小形甕形土器、欠山式段階のS字状口縁甕形土器片が樽式土器と伴出する住居跡（第III地区8号住居跡^⑧）等があり、弥生時代終末期から東海系土器の流入が活発化していたことが窺える。

1期の浅間C軽石降下前後の時期には、貝沢柳町遺跡^⑨や南志渡川遺跡^⑩等の外来系土器を主体とした遺跡が存在する一方で、上縄引遺跡^⑪や荒砥中屋敷I遺跡^⑫のように、器形・文様に在地の弥生土器である樽および吉ヶ谷・赤井戸式土器の系譜上に位置する土器が多く含まれる遺跡も併存している。この段階はI期の古段階と考えられ、荒砥島原遺跡1号方形周溝墓、上縄引遺跡1号・5号方形周溝墓^⑬、貝沢柳町遺跡1号方形周溝墓、南志渡川遺跡4号墓（前方後方形）、熊野堂遺跡第II地区1号周溝墓^⑭（前方後方形）等が該当する。また集落では、新保遺跡141号・155号住居跡、荒砥中屋敷I遺跡住居跡、南志渡川遺跡3号住居跡等がこの段階にあたる。

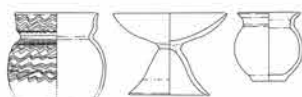
次の1期中段階は、浅間C軽石降下後まもなくと考えられる。この段階の遺構は、上縄引遺跡2号・11号・12号方形周溝墓、堤東遺跡1号（方形）・2号（前方後方形）周溝墓^⑮があるが、これらの遺構から出土した土器と類似する土器は、下佐野遺跡II地区7区4号方形周溝墓^⑯や塚本山33号墓^⑰（前方後方形）にみられるので、同一段階と考えられる。また下道添遺跡2号墓^⑱（前方後方形）出土の壺形土器は、堤東遺跡2号周溝墓（前方後方形）出土の壺形土器とよく似ており、やはり同一段階であろう。なお1期中段階の集落では、西迎遺跡住居跡^⑲等が考えられる。この中段階をもって、烏川流域においては、在地の弥生土器の残影である樽式系の櫛描文と吉ヶ谷・赤井戸系の縄文は消失するものと考えられる。

II 古墳時代（古墳時代の墳墓について）

1期新段階としては、荒砥北原遺跡1号方形周溝墓、下佐野遺跡Ⅰ地区A区4号前方後方形周溝墓等がある。集落遺跡としては、元島名將軍塚古墳に近接する4号溝中層からの一括土器と、倉賀野万福寺遺跡7号住居跡等がある。この段階の特徴としては、器受部に透孔を有する器台が出現することと、甕形土器の中においてS字状口縁の占める割合が非常に多くなることである。



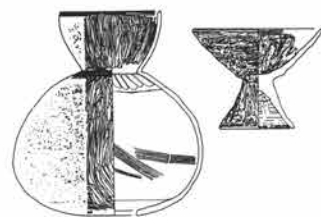
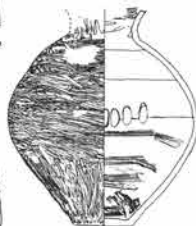
荒砥島原遺跡
1号方形周溝墓



上縄引遺跡
1号方形周溝墓



上縄引遺跡5号方形周溝墓



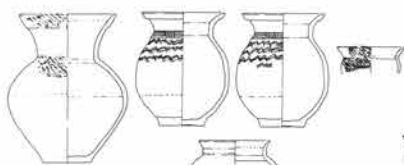
貝沢柳町遺跡1号方形周溝墓



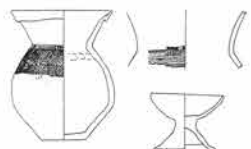
南志渡川遺跡4号墓



下佐野遺跡Ⅱ地区7区4号方形周溝墓



上縄引遺跡
11号方形周溝墓

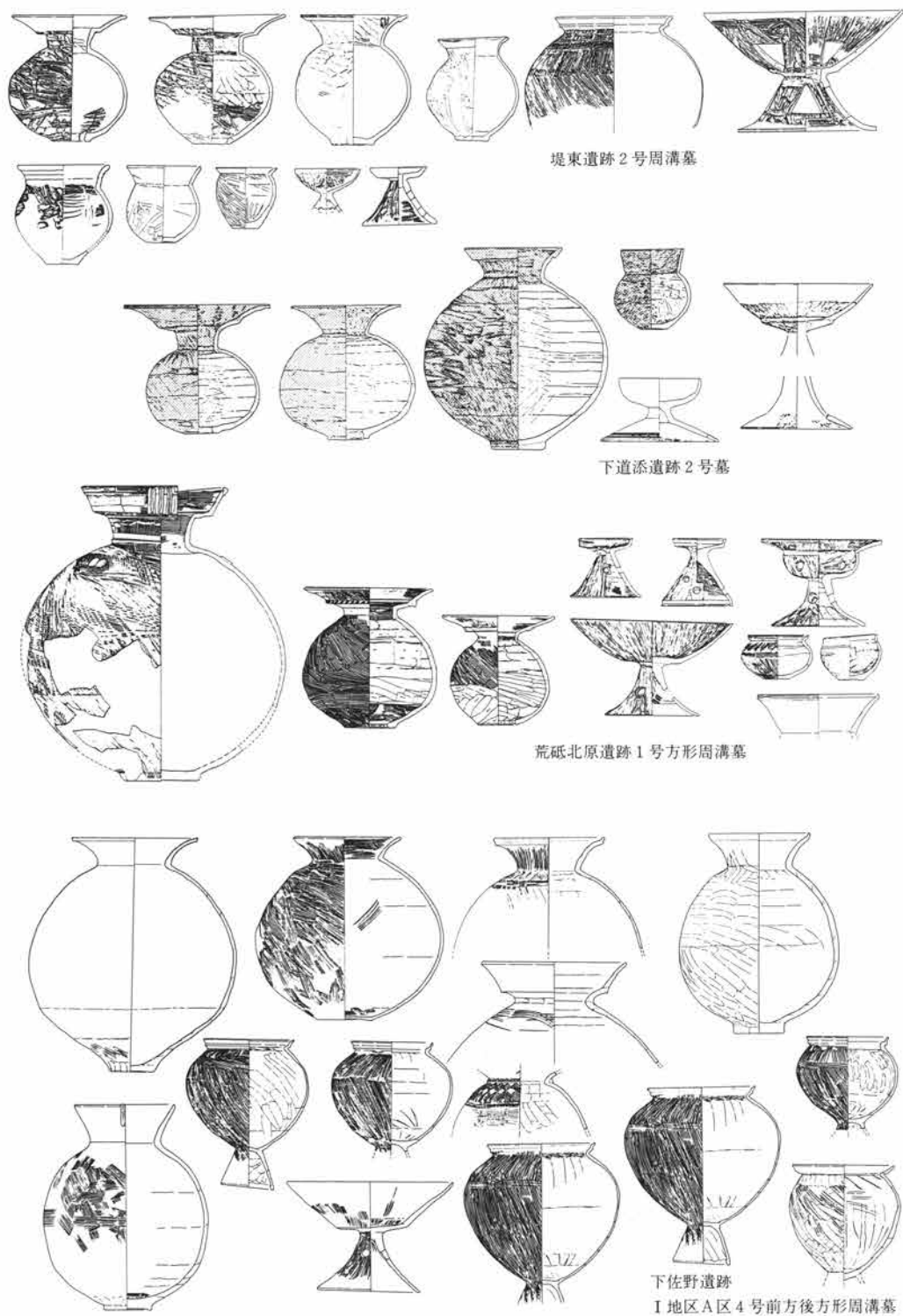


塚本山古墳群33号墓



堤東遺跡1号方形周溝墓

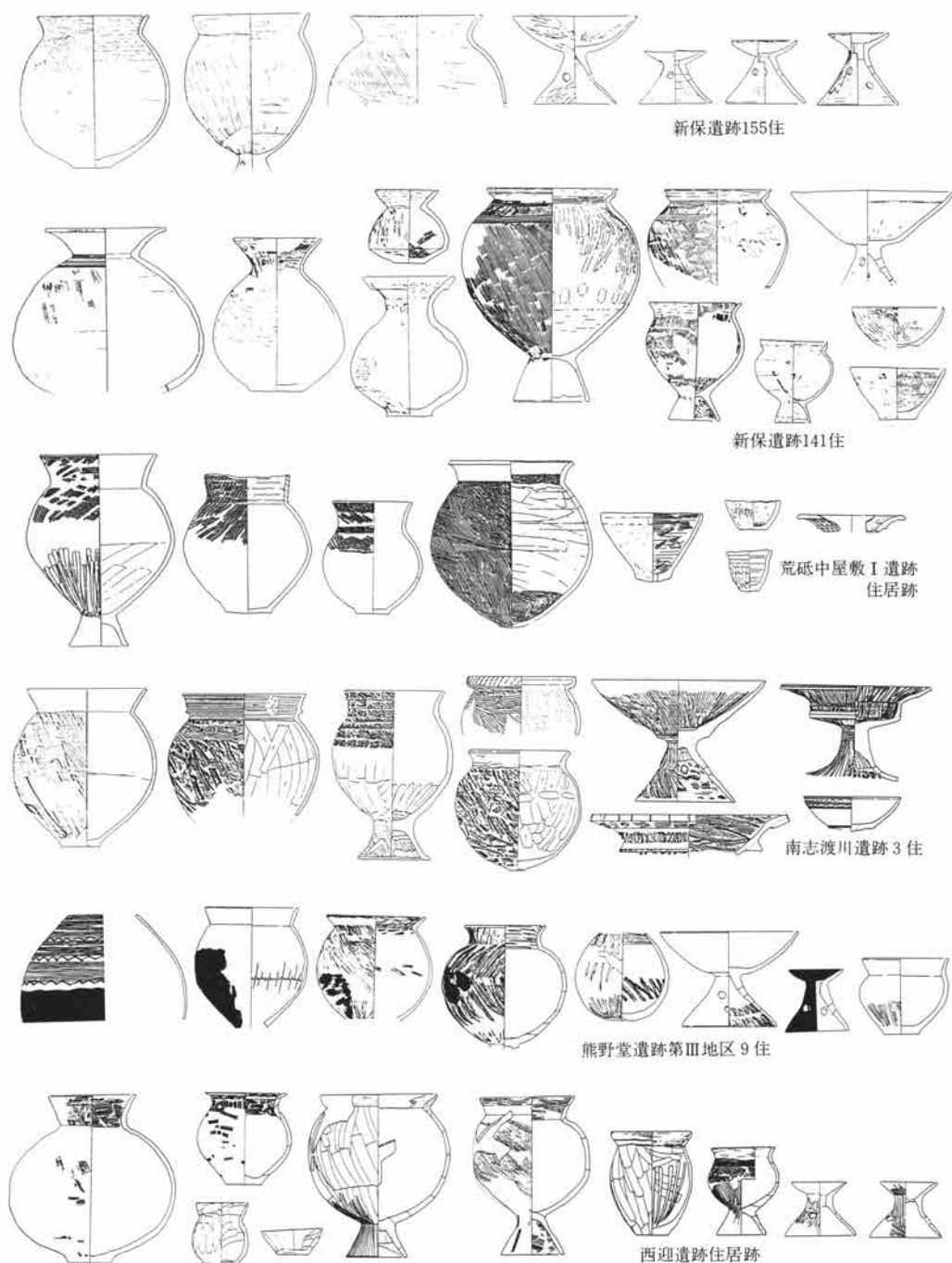
第366図 烏川水系を中心とした地域におけるⅠ－Ⅰ期の墳墓出土古式土師器（1）



第367図 烏川水系を中心とした地域におけるI-1期の墳墓出土古式土師器(2)

II 古墳時代（古墳時代の墳墓について）

なおS字状口縁台付甕については、1期の古段階と中段階では、新保遺跡141号住居跡・堤東遺跡2号周溝墓、下斉田遺跡2号住居跡等にみられるものの、主体的には存在せず、全く含まない遺構も多い。またS字状口縁台付甕は、I期を通して肩部に横線を持つと考えられるが、I期終末



第368図 烏川水系を中心とした地域におけるI-1期の集落出土古式土師器(1)



第369図 烏川水系を中心とした地域における I - 1 期の集落出土古式土師器 (2)

には肩部横線を持たない S 字状口縁台付甕が出現している可能性もある。

下佐野遺跡 I 地区 A 区 4 号前方後方形周溝墓出土の土器は、伊勢湾西岸地域の弥生終末から古墳時代初頭の土器に類似したものが存在しており、彼地の土器の系譜を引くものと考えられるが、山陰系の口縁部をもつ壺形土器は、伊勢湾西岸地域を介したものと考えることが出来るかも知れない。

群馬県平野部に分布する古式土師器は、従来石田川式土器と呼ばれ、甕形土器においては S 字状口縁が主体を占めることがその特徴とされてきた。しかし最近の調査によって、S 字状口縁台付甕が主体を占める以前に、S 字状口縁を含むものの基本的には平縁口縁の甕形土器によって構成される段階が存在することが明確となった。この段階の遺構は、1 期の中・古段階に併行するものであり、烏川水系以外では、荒砥前原遺跡 C 区 2 号住居跡、間の山遺跡 4 号住居跡、御正作遺跡 23 号住居跡、重殿遺跡 4・14 号住居跡、鹿島遺跡 7 号住居跡、今井南原遺跡 147 号住居跡、その他にも多くの遺構が検出されている。

下佐野遺跡の古墳時代前期墳墓は、1 期中段階に II 地区 7 区 4 号方形周溝墓 (第 1 グループ) が、1 期新段階に I 地区 A 区 4 号前方後方形周溝墓 (第 2 グループ) が出現する。

I - 2 期

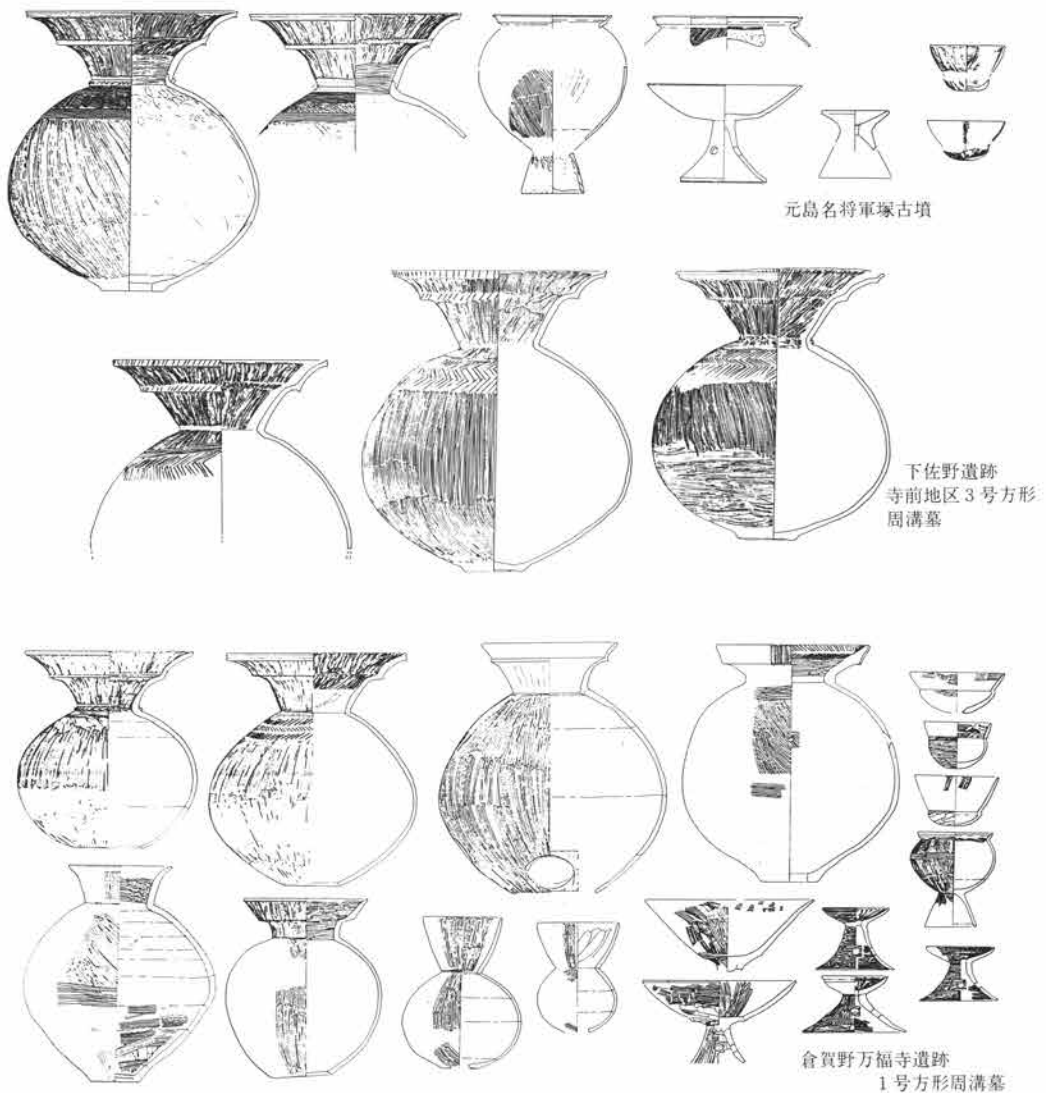
小型丸底埴や小型丸底埴、およびそれに類似した小さな平底をもつ小型埴の出現後から、長脚化した高杯が出現するまでを 2 期とした。これは納所編年の III 期、横川氏編年の五領 II 式期に対応する。この時期の烏川流域は、甕形土器においては S 字状口縁が主体的となる。ここでは、S 字状口縁台付甕に肩部横線を有するものと有しないものが併存する段階を古段階、肩部横線がみられなくなる段階を新段階として捉えた。

2 期のうち古段階は、元島名將軍塚古墳・倉賀野万福寺遺跡 1 号方形周溝墓・堀の内遺跡 C K

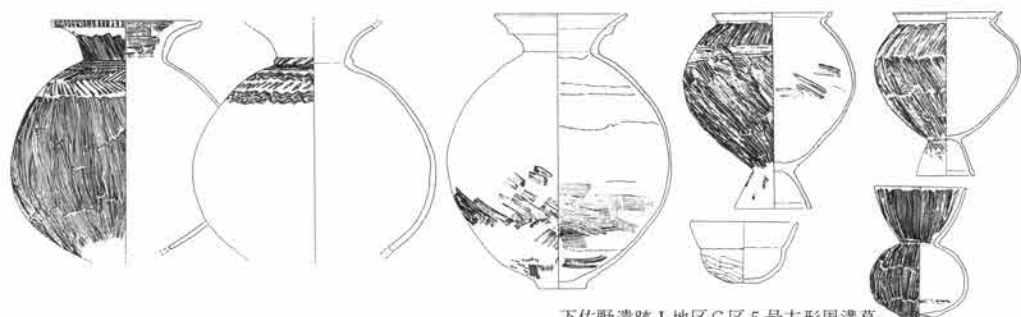
II 古墳時代（古墳時代の墳墓について）

一2号墓^①（前方後方形）等が考えられる。また集落では、綿貫遺跡住居跡^②、諏訪遺跡25号住居跡^③、堀の内遺跡BH-1号住居跡等がある。元島名将軍塚古墳から出土した壺形土器は、田口一郎氏により「伊勢型二重口縁壺」と呼ばれているが、同様な壺は倉賀野万福寺遺跡1号方形周溝墓や下佐野遺跡寺前地区3号方形周溝墓、八幡原遺跡^④、五領遺跡1号住居跡^⑤から出土しており、共伴した他の土器からも同時期で時間幅が殆んど無いことがわかる。なお、下佐野遺跡I地区C区5号方形周溝墓は、S字状口縁台付甕の形態からこの段階と考えられるが、赤色塗彩され口縁部中段に稜をもつ壺形土器は、高畑遺跡1号方形周溝墓^⑥に同種のものがあるが、同周溝墓の伴出遺物から3期～和泉期のものであり、この段階になってから供献されたか粉れ込んだものであろう。

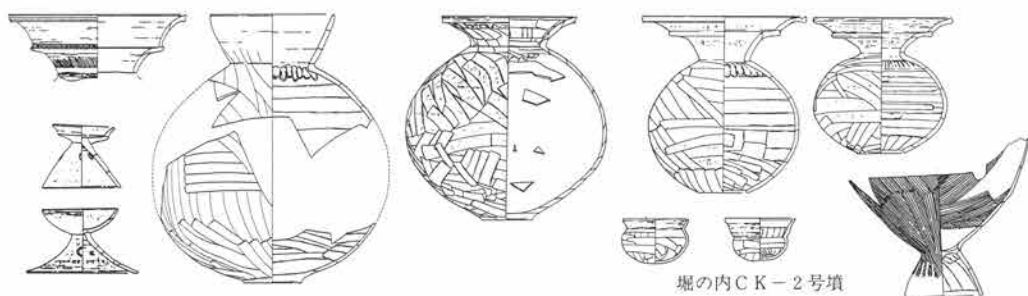
2期新段階として、I地区A区8号・5号方形周溝墓、下郷S Z42号墳、鈴の宮遺跡7号墓（前



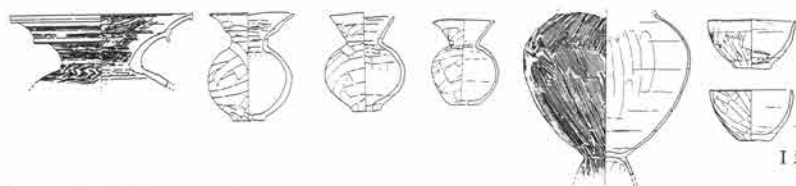
第370図 烏川水系を中心とした地域におけるI-2期の墳墓出土古式土師器（1）



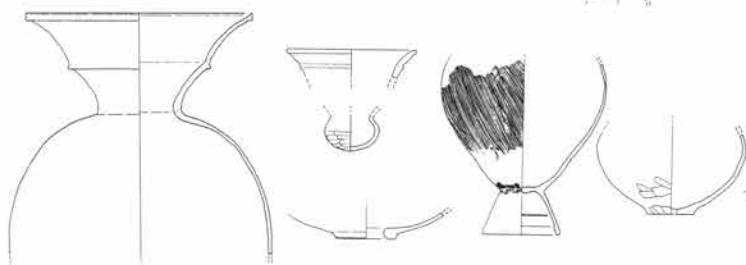
下佐野遺跡Ⅰ地区C区5号方形周溝墓



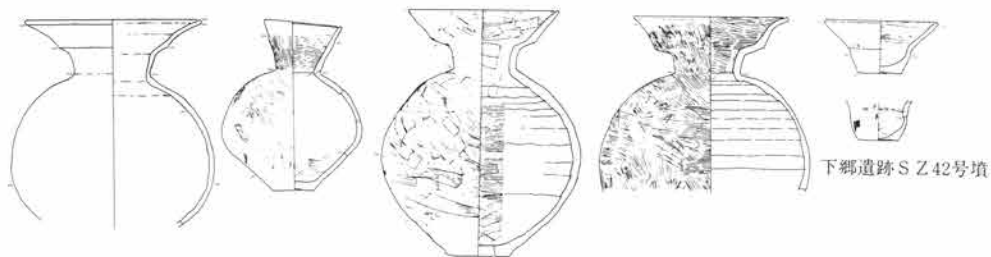
堀の内CK-2号墳



下佐野遺跡
Ⅰ地区A区8号方形周溝墓



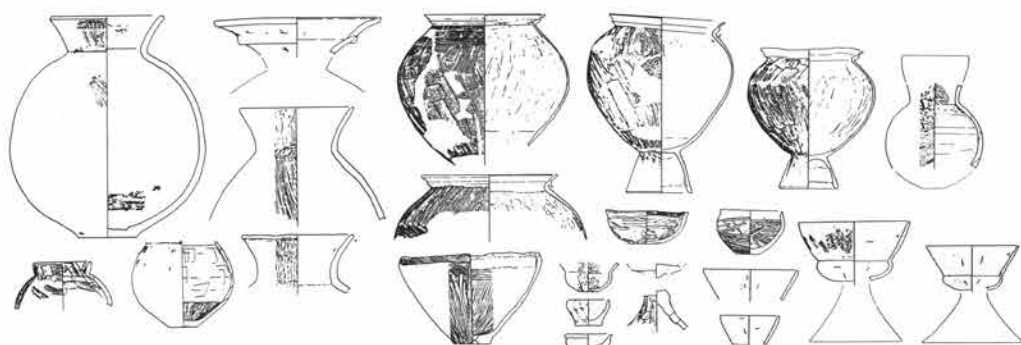
下佐野遺跡寺前地区6号古墳



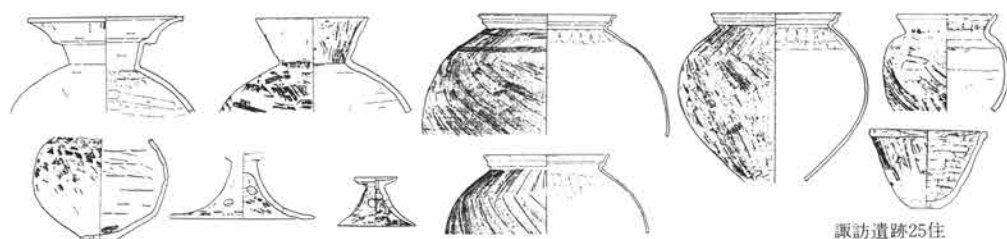
下郷遺跡SZ42号墳

第371図 烏川水系を中心とした地域におけるⅠ-Ⅱ期の墳墓出土古式土師器(2)

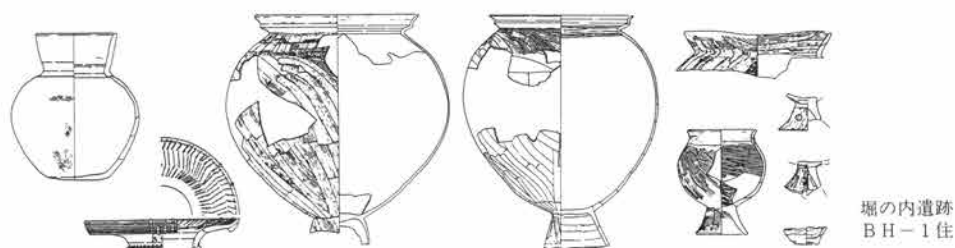
II 古墳時代（古墳時代の墳墓について）



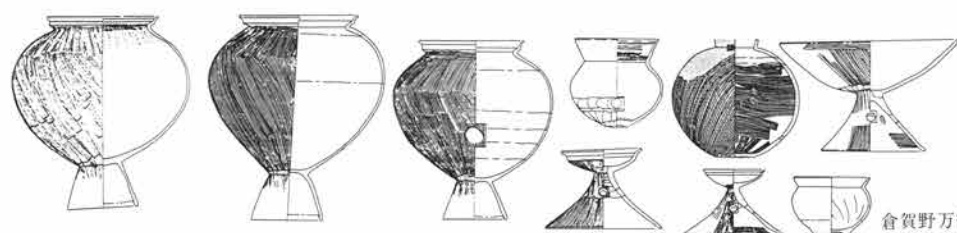
綿貫遺跡 S 1-2001 住



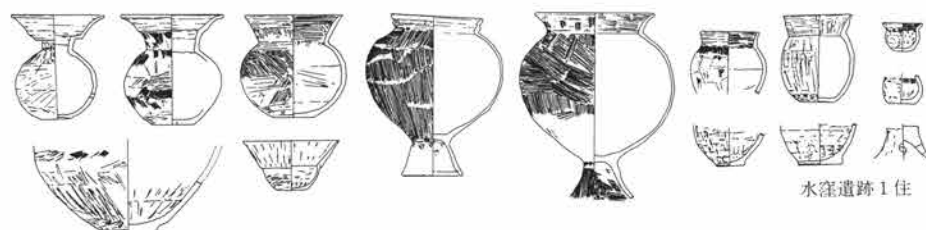
諏訪遺跡 25 住



堀の内遺跡
BH-1 住



倉賀野万福寺遺跡
4 住

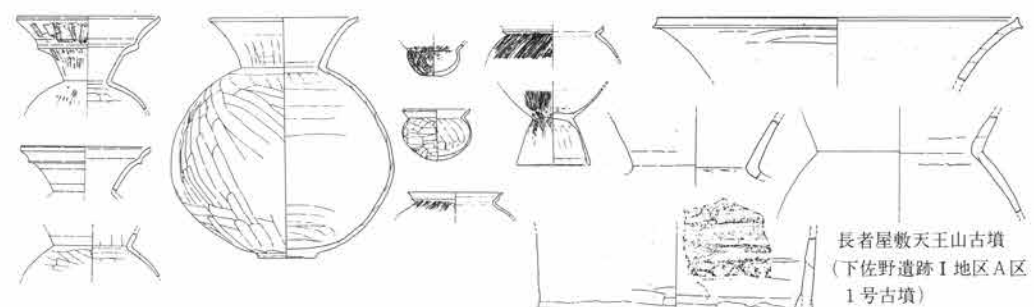
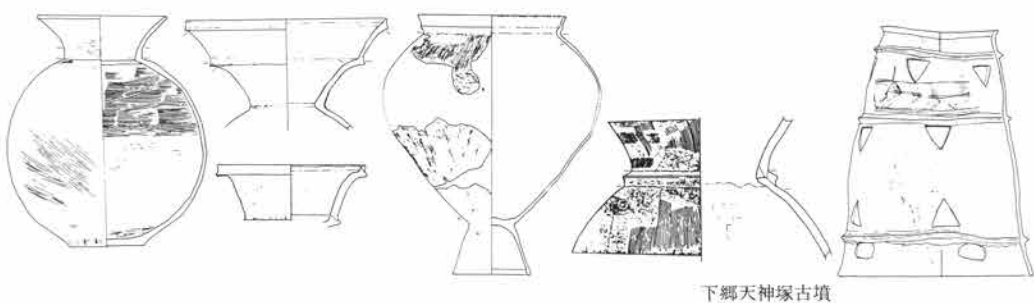
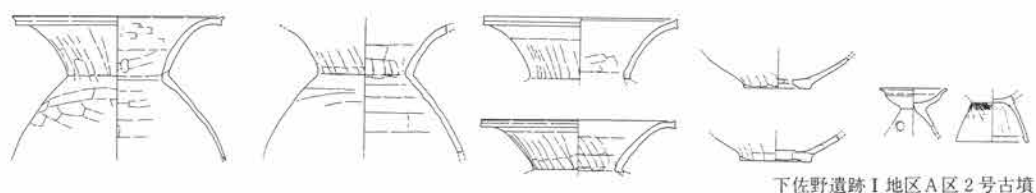
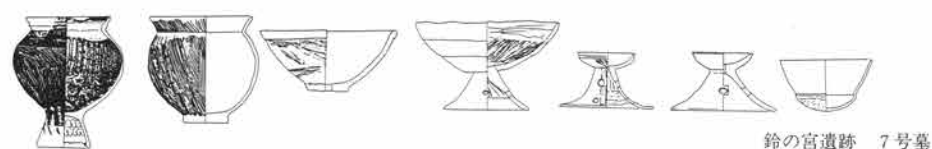
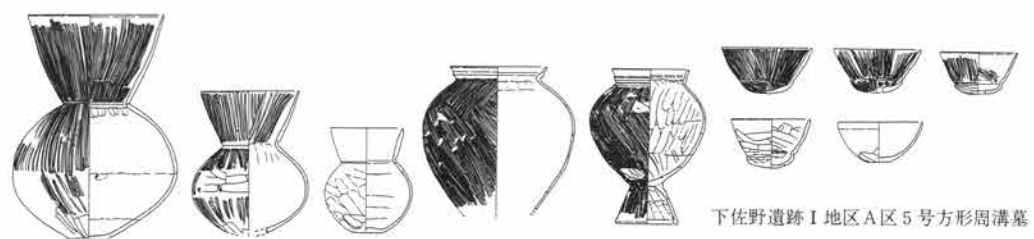


水窪遺跡 1 住

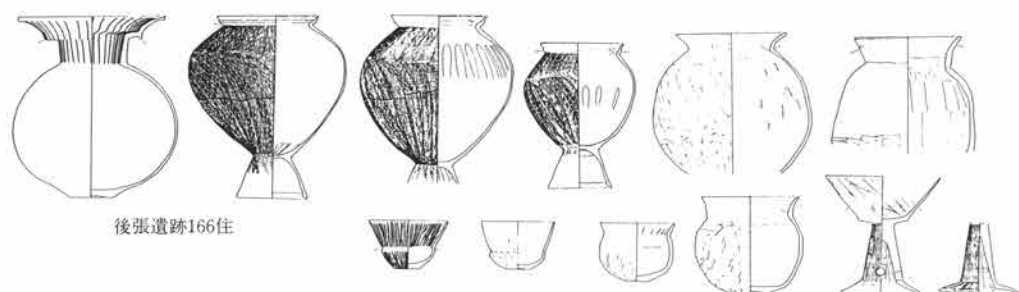
第372図 烏川水系を中心とした地域における I-2 期の集落出土古式土師器

第3章 調査の成果と問題点

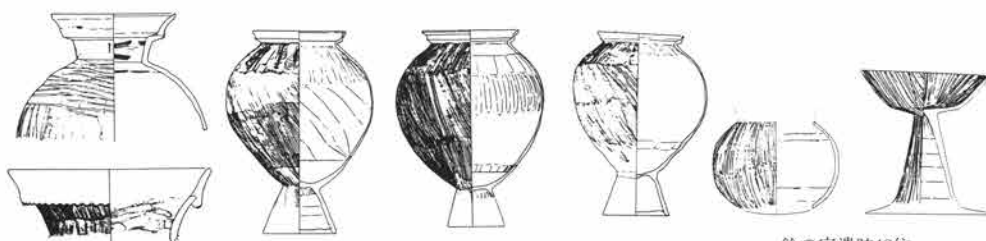
方後方形)等がある。また明確ではないが、可能性のあるものとして下佐野遺跡Ⅰ地区2号古墳、寺前地区6号・9号古墳がある。なお集落としては、倉賀野万福寺遺跡4号住居跡、水窪遺跡1号住居跡等がある。このうち下佐野遺跡Ⅰ地区A区8号方形周溝墓出土の小型壺形土器は、水窪



第373図 鳥川水系を中心とした地域におけるⅠ-2(新)~Ⅰ-3期の墳墓出土古式土師器・埴輪



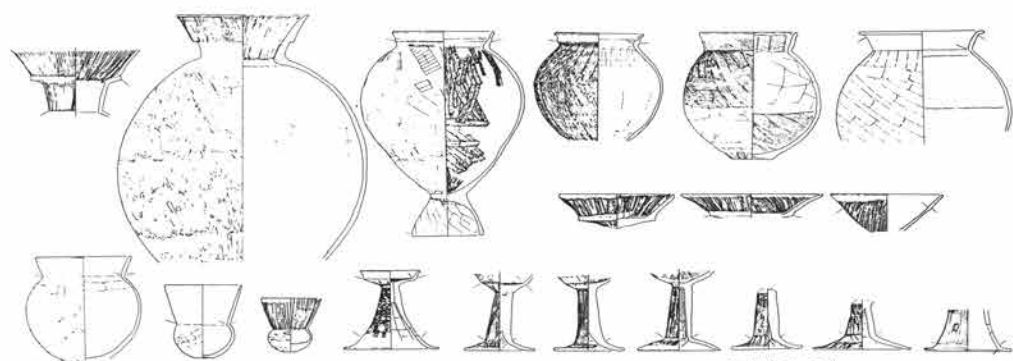
後張遺跡166住



鈴の宮遺跡48住



上滝遺跡1住



後張遺跡177住

第374図 烏川水系を中心とした地域における I - 3 期の集落出土古式土師器

遺跡の小型壺形土器と類似している。また下郷S Z42号墳にも、規模は異なるが同形態の壺形土器があり、同一段階を示すものであろう。また下佐野遺跡I地区A区2号古墳、寺前地区9号古墳の壺形土器の口唇部形態は、2期に類似したものが存在しており、本時期か下っても3期の早い頃であろう。

下佐野遺跡の2期墳墓としては、前述した以外にI地区A区10号・12号、C区3号・5号・7

第3章 調査の成果と問題点

号、D区1号・2号、II地区7区3号がある。なお出土土器が少なく1期との区別が困難なものとして、II地区7区1号方形周溝墓があり、次の3期との区別が困難なものとしては、I地区A区1号・3号・6号・7号・9号、I地区C区1号・2号・6号方形周溝墓がある。

I-3期

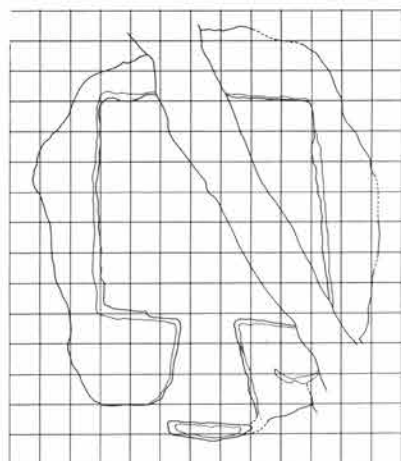
住居跡から長脚化した高杯と伴出した遺物を同時期と考え、3期とした。これと併行する時期の墳墓として、下郷天神塚古墳・長者屋敷天王山古墳（下佐野遺跡I地区A区1号）、下佐野遺跡I地区A区3号方形周溝墓等が考えられる。下郷天神塚古墳出土のS字状口縁台付甕は、後張遺跡177号住居跡出土の甕と同一段階を示している。また下佐野遺跡I地区A区3号方形周溝墓からは、長脚化した高杯の破片が出土している。長者屋敷天王山古墳出土の土器は、すべて周堀内からであるが、1～2期および古墳時代後期の遺物と混在する出土状態であり、本古墳に伴う遺物の特定は難かしいが、これら他時期の遺物を除外した残りのうちのいくつかを第373図に掲げた。土器は、古墳時代中期の和泉期古段階にみられるものも含まれており、3期の終末から和泉期への過渡期であろう。下佐野遺跡の3期墳墓は、出土土器に限られていることもあって、上述した以外には特定することが難かしい。

出土土器からみた古墳時代前期の墳墓は、1期の中段階から3期の終末まで連続して造営された。しかし1期は少なく、殆んどは2期から3期にかけてのものである。これを各グループ別に比較・検討する必要があるが、幅25mという新幹線の路線のみの調査では、困難と言わざるを得ない。第1グループと第3グループにおいては、調査区内において確認されたのは方形周溝墓のみであるが、第2グループにおいては、1期新段階にI地区A区4号前方後方形周溝墓が築かれたあと、続いて方形周溝墓が築かれ、2期の新段階にはおそらく直径約30mの円墳となるとと思われるI地区A区2号古墳が築かれた。そして3期の末には直径約42mの長者屋敷天王山古墳が築かれている。また北端部の第4グループでは、2期古段階に方形周溝墓（寺前地区3号）のあと、新段階には寺前地区6号古墳、ひき続いて9号古墳（共に前方後方墳）が築かれている。

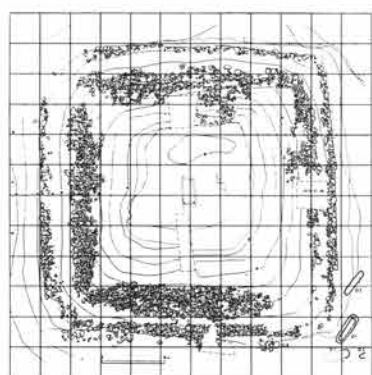
(2) 古墳時代前期墳墓の企画について

古墳時代前期の墳墓については、多くの遺跡で1尺約24cmの晋尺使用の可能性が指摘されている。ここではI地区A区4号前方後方形周溝墓と、寺前地区6号古墳についてその可能性を考えるが、類例としてほぼ同時期の築造と考えられる福岡県久留米市祇園山古墳例^{④①}を加えた。

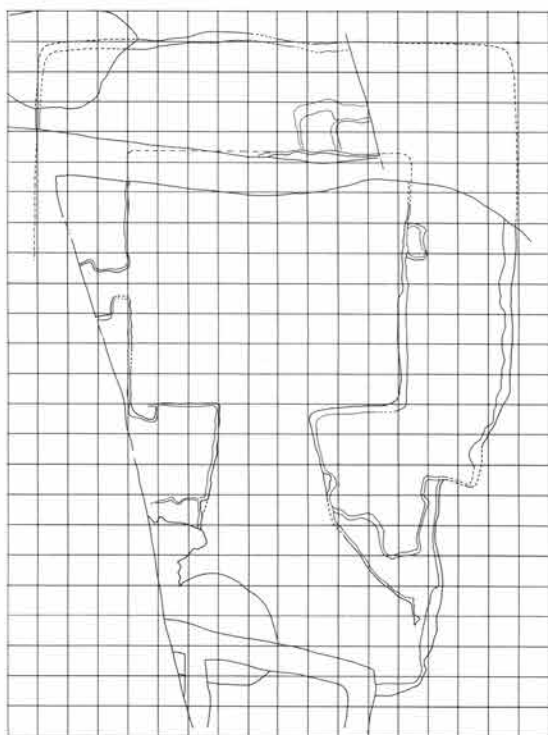
古墳時代初頭において晋尺が使用されていたと仮定して論を進めると、I地区A区4号前方後方形周溝墓については、方台部が70尺×70尺となる可能性が考えられる。なお、前方部に向かって右側と前方部側の辺が開く形となっているが、これは単なる誤差ではなく、当初から左右非対称に企画されたものであろう。寺前地区6号古墳については、方台部が90尺×85尺で、前方部側の辺は30尺づつに分割され、中央が前方部へと続く形となる。また前方部の周堀を含めた幅については、160尺となるものと思われる。久留米市祇園山古墳については、一辺100尺の正方形と考



下佐野遺跡Ⅰ地区A区4号前方後方形周溝墓



福岡県久留米市祇園山古墳



下佐野遺跡寺前地区6号古墳

1マス2.4m(魏・西晋尺で10尺)

第375図 古墳時代前期墳墓の平面企画

えることが出来る。なお祇園山古墳の向かって右側の葺石は整合しないが、墳丘盛土の裾は一辺100尺となっている。

古墳時代前期墳墓の企画に用いられた尺度については、漢時代の尺が使用されたという先解や、中国の制度尺は使用されなかったとする見解がある。特に後者については、制度尺の使用を必要とするような社会では無かったとするものであり、この問題は古墳時代前期社会の評価にかかわる重要な問題でもあるため、若干この点について考えてみたい。

「晋尺」と一般に称されている尺度は、西晋王朝によって使用された尺であるが、晋王朝の成立は、司馬炎による前王朝の魏からの「禪讓」であり、尺については魏王朝から引き続いて同じものが使用されたと考えられる^⑧。従って正確には、「魏・西晋尺」と呼称すべきものであろう。なお「隋書」律曆志によると、晋尺には「晋前尺」と「晋後尺」があり、晋前尺は楽律尺、晋後尺は晋が江南に都を遷してから（東晋）のものである。

日本列島内の政治勢力は、魏・西晋王朝とは密接な関係をもっていた。魏の景初2年（238）6月4万の兵を率いた司馬懿は遼東を攻略し、呉と結び独立の形勢を示した公孫淵を討滅する。こ

れによって遼東四郡（遼東・帯方・楽浪・玄菟）に実質的な魏の支配力が及ぶようになるが、それから1年後の景初3年6月、邪馬台国女王卑弥呼は魏へ遣使する。それは魏朝において実力No.1となりつつあった司馬懿の主導のもとに計画・遂行されたとも考えられるが、ここで重要なことは、公孫政權当時は遼東と呉との海上交易が盛んであったということと、遼東四郡が魏に帰した翌年の景初3年に、呉軍の羊衡が海上から遼東を攻略していることであろう。魏と呉との戦いは毎年のように繰り返されており、遼東半島から朝鮮半島にかけての魏の商船が、魏皇帝との君臣関係が成立した日本列島（邪馬台国）に頻繁に向かったであろうことは容易に想像がつく。時として交易に必要となったであろう尺については、魏の尺が使用されたと考えることが自然であろう。邪馬台国が日本列島内のいずれに存在したにせよ、交易や当然考えられる魏からの渡来人（主として朝鮮半島か）たちを通じて、魏の尺が弥生時代後期から終末期の日本列島に入っていたと考えることは出来よう。泰始2年（266）11月、邪馬台国女王壹与は晋に遣使する。それは禪譲によって司馬懿の孫の司馬炎が帝位についた翌年であった。このタイミングの良さを邪馬台国女王家と、かつて東方と密接な関わりを持った司馬家との関係とみることも出来ようが、とにかく魏との交流は存続していたのであろう。

日本列島に定型化した前方後円（方）墳が出現するのは、3世紀後葉から4世紀初頭と考えられている。それは邪馬台国王女壹与が晋に遣使してから10年～40年後のことであるが、最初の大形前方後円墳とされる箸中山古墳（箸墓）には、「魏・西晋尺」が使用されている可能性が強い。すなわち白石太一郎氏による復原値^⑭では、箸中山古墳は墳丘長276m、前方部長126m、後円部径156m、くびれ部幅60m、前方部前面幅132mで、一尺24cmとすると、墳丘長1,150尺、前方部長525尺、後円部径650尺、くびれ部幅250尺、前方部前面幅550尺となる。また梅沢重昭氏や辰巳和弘氏によって、25尺（6m）を単位とするモジュールが存在したとする説^⑮も出されているが、箸中山古墳の各部はすべて25尺（6m）で割り切れる数値でもある。

魏晋南北朝時代初期の複雑な国際関係の中で成立した、君臣関係を基礎とする魏・西晋王朝との交流を通じて、「魏・西晋尺」が弥生後期から終末期にかけての日本列島で部分的であるにせよ使用されるようになり、それがやがて古墳築造にも使用されるようになったと推定したのであるが、その妥当性については、発掘調査による多くの遺構での検証と、当時の国際交流のあり方についての検討を必要としよう。

2 後期および終末期の墳墓について

この時期の墳墓としては、帆立貝型古墳であるII地区7区3号古墳、前方後円墳となる可能性のある寺前地区4号古墳（長山古墳）、方墳となる可能性の強い寺前地区7号古墳等もあるが、大部分は円墳か円墳となる可能性の強いものである。また石槨3期がある。なお古墳には、埴輪を有するものと有しないものがある。埴輪を有しない古墳については、I地区B区2号古墳・I地区D区9号古墳のように、石室または副葬遺物の一部が確認されたものもあるが、他の多くの古

墳については周堀のみの確認であり、直接的には築造時期を示すものは見当たらない。しかし埴輪を有しない古墳については、埴輪が使用されなくなった時期の古墳である可能性が強く、ここでは埴輪消滅後に築造されたものと考えておきたい。

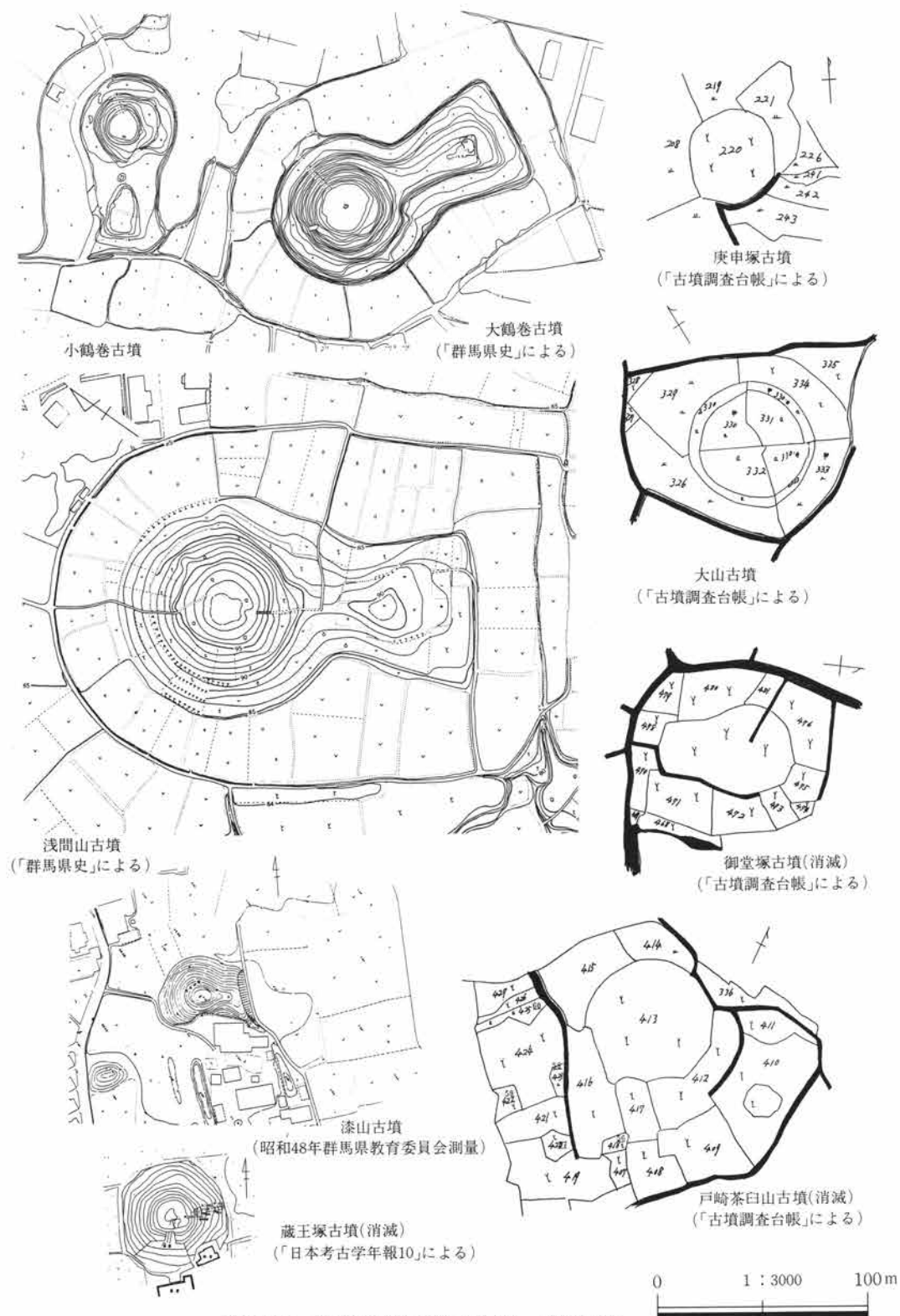
前期末から中期への過渡期においては、直径約30mの円墳となる可能性の強いI地区A区2号古墳や、直径約42mの円墳であるI地区A区1号古墳（長者屋敷天王山古墳）が築かれた。しかしこれに続く時期（5世紀前半～中葉）の古墳は、調査区内においては確認されていない。調査区内において再び古墳が出現するのは、5世紀末葉を前後する時期である。それはI地区B区3号古墳とI地区C区1号古墳で、両古墳は約35mと近接して存在し、規模は共に直径約18mである。両古墳からの出土遺物に円筒埴輪があるが、いずれも横ハケをもつものが含まれており、またC区1号古墳の周堀内からは、後期初頭の土師器小形壺形土器が出土している。

後期の墳墓は、前期の墳墓である周溝墓や古墳の間隙に造られている。前期墳墓と重複する古墳として、II地区7区1号古墳があるが、これは重複する方形周溝墓の一辺が5～6mという小規模なためであろう。その他については、周溝墓の周溝と古墳の周堀の重複がみられるのみである。つまり後期の墳墓は、前期墳墓との重複を避けながら、前期墳墓の周囲へ造られていったことがわかる。調査区内においては、5世紀末葉を前後する時期から、円筒埴輪が縦ハケのみとなる6世紀中葉・後葉を経て、埴輪がみられなくなる7世紀代まで、連続して造営されたものと考えられる。

下佐野遺跡の存在する烏川左岸段丘上には、古墳が多く存在しており、佐野古墳群または下佐野古墳群と呼ばれている。ここには墳丘長60mの前方後円墳である漆山古墳が現存（前方部は消滅、寺前地区9号古墳の東方50mに存在）しているが、かつては漆山古墳の北方約100mにも墳丘長65mの御堂塚古墳が存在していた。また漆山古墳の東方約70mには、群馬大学によって調査された直径約50mの円墳である蔵王塚古墳^⑤も存在していた。これらの古墳については、出土遺物や横穴式石室の存在等から6世紀代と考えられているが、この3基の古墳のうち、最初に築造されたのが前方部が剣菱型を呈するとも推定され、七鈴鏡を出土した御堂塚古墳であろう。この御堂塚古墳は、明治8年に横穴式石室が開口したが、大正11年に道路建設用の盛土として利用されたため消滅した。御堂塚古墳は、6世紀中葉を前後する時期となる可能性が強いが、続いて築造されたのが横穴式石室の形態から漆山古墳であり、最も新しいのが蔵王塚古墳^⑦であろう。漆山古墳も蔵王塚古墳も埴輪をもっており、6世紀後半代に築造されたものと考えられる。

下佐野遺跡における比較的規模の大きな古墳には、前期に寺前地区6号・9号という2基の前方後円墳がある。そして前期から中期へ移行する時期には、I地区A区1号・2号古墳が築かれた。しかしI地区A区1号古墳（長者屋敷天王山古墳）が築かれたあと、後期になってから墳丘長65mの御堂塚古墳が出現するまで、比較的規模の大きな古墳は調査区内および周辺には認められない。また地籍図上においても比較的規模の大きな古墳の痕跡を発見することは難かしい。過去に何の痕跡も残さずに消滅してしまったことも考えられないわけではないが、古墳の立地する

第3章 調査の成果と問題点



第376図 下佐野遺跡周辺の大型・中型古墳

II 古墳時代（古墳時代の墳墓について）

場所はすべて畑地と宅地であり、戦前にはかなり小規模な古墳まで残存していたことを考えると、何の痕跡も残さずに消滅した、おそらく100年前後の間に築造されたであろう数基の比較的大きな古墳の存在を想定することは、難かしいように思われる。したがって比較的規模の大きな古墳は、5世紀前葉から6世紀前葉の約100年間は造られなかった可能性もある。

5世紀初頭の時期には、遺跡の東方約500mには、大鶴巻古墳（123m）や浅間山古墳（171m）といった大型古墳が出現する。なかでも浅間山古墳は、5世紀初頭前後の時期において東日本最大の規模をもっており、毛野連合体首長墓と考えられている。この大鶴巻・浅間山古墳の粕沢川を隔てた西側には、大山古墳・戸崎茶臼山古墳（消滅）・庚申塚古墳という3基の円墳があり、出土遺物から大鶴巻古墳や浅間山古墳とほぼ同時期で、相互の密接な関連も既に指摘されている^⑮。ところで、大山古墳と戸崎茶臼山古墳は直径60m、庚申塚古墳は直径42mの規模をもつ。I地区A区1号古墳（長者屋敷天王山古墳）は、庚申塚古墳と同じ直径42mであり、粕沢川兩岸の古墳とほぼ同時期であることから密接な関連が想定される。すなわち長者屋敷天王山古墳の墳丘形態・規模は、大鶴巻・浅間山古墳被葬者を頂点とする政治秩序の中で成立した可能性が強いのである。

ところが5世紀前葉から中葉にかけては、毛野の連合体首墓は、大間々扇状地東側の所謂太田古墳群へと移っていく（別所茶臼山古墳168m・太田天神山古墳210m）。下佐野遺跡に比較的規模の大きな古墳がみられなくなるのは、所謂太田古墳群に連合体首長墓が移っていく時期と一致しており、下佐野遺跡を墓域とした首長層は、大鶴巻・浅間山古墳被葬者層と命運を共にして衰退した可能性も考えられる。やがて5世紀後葉になると、所謂太田古墳群の勢力は没落し、100m前後の前方後円墳が新たに出現する地域も少なくないが、下佐野遺跡に直ちに比較的規模の大きな古墳が復活することは無かった。それは如何なる理由によるものであろうか。これからの研究課題である。

（飯塚）

（注）

- ① 伊藤久嗣「遺物・遺構の考察」『納所遺跡』三重県教育委員会 1980
- ② 横川好富「埼玉県の古式土師器」『埼玉県史研究』第10号 埼玉県 1982
- ③ 加納俊介「土器の交流—東日本—」『考古学ジャーナル』No252 ニューサイエンス社 1985
- ④ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学会 1974
- ⑤ 浅井和宏「パレススタイル」『欠山式土器とその前後』愛知県考古学談話会 1986
- ⑥ 『弘法山古墳』松本市教育委員会 1978
- ⑦ 『熊野堂遺跡(1)』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- ⑧ 『熊野堂遺跡第III地区・雨壺遺跡』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- ⑨ 『貝沢柳町遺跡』高崎市教育委員会 1986
- ⑩ 『美里町史』通史編 埼玉県児玉郡美里町 1986
- ⑪ 『西大室遺跡群II』前橋市教育委員会 1981
- ⑫ 松田 猛「荒砥中屋敷I遺跡」『群馬文化』第195号 1983
- ⑬ 『荒砥島原遺跡』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- ⑭ 『西大室遺跡群II』前橋市教育委員会 1981
- ⑮ 「熊野堂遺跡・第II地区」『年報2』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- ⑯ 『新保遺跡II』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- ⑰ 『堤東遺跡』群馬県教育委員会 1985
- ⑱ 『下佐野遺跡II地区』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

第3章 調査の成果と問題点

- ⑭ 『塚本山古墳群』 埼玉県教育委員会 1977
- ⑮ 『下道添遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987
- ⑯ 『深津地区遺跡群』 群馬県勢多郡柏川村教育委員会 1985
- ⑰ 『元島名将軍塚古墳』 高崎市教育委員会 1981
- ⑱ 『倉賀野万福寺遺跡』 高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会 1983
- ⑲ 『下斉田・滝川A・B・C遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- ⑳ 『荒砥前原遺跡・赤石城址』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- ㉑ 『西太田遺跡』 伊勢崎市・伊勢崎市教育委員会 1983
- ㉒ 『御正作遺跡』 群馬県邑楽郡大泉町教育委員会 1984
- ㉓ 『重殿遺跡』 群馬県新田郡新田町教育委員会 1984
- ㉔ 『赤堀村鹿島遺跡』 群馬県佐波郡赤堀村教育委員会 1977
- ㉕ 『今井南原遺跡発掘調査概報』 群馬県佐波郡赤堀村教育委員会 1980
- ㉖ 『A1掘ノ内遺跡群』 藤岡市教育委員会 1982
- ㉗ 『綿貫遺跡』 高崎市教育委員会 1985
- ㉘ 『下田・諏訪』 埼玉県教育委員会 1979
- ㉙ 『八幡原遺跡』 高崎市教育委員会 1974
- ㊀ 『土師式土器集成』本編1 東京堂出版 1971
- ㊁ 『鴻池・武良内・高畑』 埼玉県教育委員会 1977
- ㊂ 『下郷』 群馬県教育委員会 1980
- ㊃ 『鈴ノ宮遺跡』 高崎市教育委員会 1978
- ㊄ 『水窪・新井遺跡の調査』 埼玉県大里郡岡部町教育委員会 1976
- ㊅ 『後張』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- ㊆ 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 XXVII 福岡県教育委員会 1989
- ㊇ 石部正志ほか『巨大古墳と倭の五王』 青木書店 1981
- ㊈ 現在、中華人民共和国で発行されている古代の尺度を扱う書籍類の殆んどが、魏と西晋は同じ尺度が使用されたとしている。
- ㊉ 白石太一郎ほか『箸墓古墳の再検討』『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集 国立歴史民俗博物館 1984
- ㊊ 梅沢重昭『毛野の古墳の系譜』『考古学ジャーナル』No150 ニューサイエンス社 1978
- ㊋ 辰巳和弘『日本の古代遺跡』I 静岡 保育社 1982
- ㊌ 尾崎喜左雄『群馬県高崎市蔵王塚古墳』『日本考古学年報』10 誠文堂新光社 1963
- ㊍ 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』 吉川弘文館 1966
- ㊎ 金子智一ほか『鳥川・井野川流域における古墳出現期の地域相』『古墳出現期の地域性』北武蔵古代文化研究会ほか 1984